

全文構造解説

この冊子の使い方

1つの文について、【英文】→【構造】→【解説】→【語句】の順で並んでいる。

1. 【英文】を音読する。構造と内容が理解できれば、次の【英文】に進んでよい。理解できなければ、
2. 【構造】を音読する。文の構造と、まとめりごとの訳（直訳）を確認する。さらに、必要に応じて、
3. 【解説】を読む。直訳を咀嚼して、要するにどういうことを言っているのか、内容の理解を試みる。
この時点で理解できなければ、「解答・解説」の日本語訳（意識）で内容を確認する。
4. 理解した内容を念頭に、構造と内容が理解できるまで、繰り返し【英文】と【構造】を音読する。
5. 【語句】を音読して、意味を確認する。

最後にもう一度、できれば二度三度、本文英文を、できるだけ速く、頭から意味をとりながら読むこと。

凡例および注意点

凡例：

① = 大問番号 ❶ = 段落番号 ❶ = 文番号

【構造】 = 【構造】

主 = 主語 動 = 動詞 目 = 目的語 補・名 = 補語となる名詞

副 = 副詞 関代 = 関係代名詞 過分 = 過去分詞 など

「 」 = 直前部分までの訳（直訳中心）

[] / { } / [[]] など = 注意を要する、句や節などの意味のまとめり

*❶ = 【解説】 とくに注意を要する箇所の指摘および解説

【暗例】 = 例文。暗唱できるようになることを強くお勧めする

() = 省略可、あるいは補足・別表現

[] = 直前の語句との入れ換え可

< > = 重要な用語、あるいは構文・イディオム

【語句】 = 【語句】

[|] = 発音。左側が発音記号。右側が発音時の目安となるカタカナ表記で、ゴシック体はアクセント

⇒ = 派生語・反意語 など

注意点：

【構造】と【解説】は、既出表現や構造が平易な英文については、簡略化、あるいは省略することがある

英文の構造について

英文の構造は、〈文の要素〉と〈副詞〉で説明できる。文の要素とは、主語 (S)、述語動詞 (V)、目的語 (O)、補語 (C) のことで、これらの意味のまとまりを正しい順序で並べることで「文法的に正しく、意味の通る」文が成立する。文の要素が欠けたり、順序が正しくなかったりすると、このような英文は成立しない（だから、文の要素と呼ぶのである）。他方、副詞は文の要素ではなく、なくても文法的に正しい文が成立し、置く位置（順序）も比較的自由である。もちろん、文の要素でなくても、副詞も重要である。例えば、副詞 not がないと英文の意味はまったく逆になってしまう。

主語とは、日本語の「～は、～が」にあたる、文の主体となる名詞の意味のまとまりのこと。述語動詞とは、日本語の「～する、～である」にあたる、主語の動作や存在を表す意味のまとまりのこと。目的語とは、日本語の「～を、～に」にあたる、主語の動作の目標（目的）となる、主語とは異なる名詞の意味のまとまりのこと。補語とは、主語や目的語の内容を補う、名詞あるいは形容詞の意味のまとまりのこと。内容的に〈主語＝補語〉あるいは〈目的語＝補語〉が成立する。

文の要素と副詞は、文構造の「役割」としての品詞に分類できる。つまり、主語と目的語は必ず名詞、述語動詞は動詞、補語は名詞あるいは形容詞である。これに副詞を加えた4つの品詞は、〈単〉語のほかに、複数の語からなる意味のまとまりである〈句〉や〈節〉の形をとることもある。

これら4つの品詞の性質についてまとめると、名詞は「人、もの、こと」を表し、動詞は名詞の動作や存在を表し、形容詞は必ず名詞を形容（修飾）し、副詞は名詞以外のあらゆるものを修飾する。

句と節についてまとめると、節とは〈主語＋動詞 (SV)〉構造を中心とする1つの意味のまとまりのことで、句とはSV構造を中心としない1つの意味のまとまりのこと。まず節は、文の中心となる〈主節〉と、主節に従う〈従属節〉に大別できる。従属節はふつう接続詞に導かれて、名詞節や副詞節になる。次に句は、複数の語で1つの名詞の意味となる名詞句、同じく1つの動詞の意味となる句動詞（*動詞句とはいわない）、同じく形容詞句、副詞句となる。

上記の内容は英文法の構造に関わる原則であり、例えば関係詞や to 不定詞、間接疑問といった個別の文法項目は、本来、この構造の中で説明されるものである。そして、原則とは、意識する必要がなくなるくらいまで、繰り返しの訓練によって徹底的に身につけるべきものである。

本冊子は、この原則が具体的に確認できることを目的に作られた。すべての文について、文の要素と副詞を「意味のまとまり」で切り分け、それぞれがどのような形（名詞句・節や副詞句・節など）になっているのか、その構造が確認できるようになっている。容易に理解できる文もあればそうではない文もあるだろうが、最初のうちは共通する文構造を意識し、繰り返しの訓練によって身につけてほしい。やがてこれを意識下に追いやることができれば、英語力の土台は十分にできあがっているはずである。

1

1 1 In a recent *Rolling Stone* feature reflecting on her career, the musician and actress Kate Nash explained that the boredom she experienced as a teenager led her to start writing her music.

構造 副 [In a recent *Rolling Stone* feature 現分]^{*1} {reflecting on 目 her career}, 「彼女の経歴を考察する最近の『ローリング・ストーン』誌の特集で」 主 the musician and actress Kate Nash 動 explained 「ミュージシャンで女優のケイト・ナッシュは説明した」 目^{*2} [接 that 「～ということ」 主 { 目 the boredom 関代^{*3} 主 she 動 experienced 副 as a teenager } 「十代のときに彼女が経験した退屈は」 動 led 目 her 「彼女を導いた」 副^{*4} [to start 目 [[writing 目 her music]]], 「自分の音楽を書くことを始めることに」

*1: reflecting (on) は、直前の名詞 a recent *Rolling Stone* feature を後ろから修飾する、現在分詞の形容詞用法。形容詞は必ず名詞を修飾するが、主に前から絞り込んで修飾する〈限定用法〉と、後ろから説明的に修飾する〈叙述用法〉がある。ここでは後ろから修飾（後置修飾という）する叙述用法。また、現在分詞（-ing 形）には動詞としての機能が残っているので、目的語をとることができる。目的語を直接とる動詞を〈他動詞〉といい、目的語をとらない、あるいは目的語をとるために前置詞や副詞を要する動詞を〈自動詞〉という。ここでは前置詞 on が続くので reflect は自動詞だが、reflect on は頻度の高い熟語（句動詞）として1つの他動詞とらえ、続く名詞 her career をその目的語と解釈した。なお、ここでの In ～のように、〈前置詞＋名詞〉のかたちは原則として副詞句と考えるとよい。副詞は場所、とき、理由、様子などを表すが、ここでは「雑誌の特集記事（の中）で」という場所を表すと考える。reflect on her career も、on ～の部分副詞句と解釈しても構わない（ただし、reflect on を句動詞と解釈したほうが実用的である）。

*2: 文の冒頭に接続詞 that を置くことで、文を名詞節に変換できる。これを〈that 節〉といい、「～ということ」という名詞の意味のまとまりになる。I think that ～. 「～と（いうことを）考える」や I know that ～. 「～ということを知っている」の that ～の部分も、動詞 think や know の目的語となる that 節であり、名詞の意味のまとまりである。なお、この that はよく省略される。

*3: 関係代名詞 that/which が省略されている。関係代名詞とは、文を名詞節に変換するときに使われる記号と考える。できあがった名詞節は、先行詞を中心とする、名詞の意味のまとまりになる。ここでは、主 she 動 experienced 目 the boredom 副 as a teenager. 「彼女は十代のときにその退屈を経験した。」という文が、動詞 experienced の目的語 the boredom を先行詞とする名詞節 the boredom (that/which) she experienced as a teenager 「彼女が十代のときに経験したその退屈」に変換されたもの。先行詞を中心とする名詞の意味のまとまりが、文全体の主語になっていることを理解する。なお、先行詞がもとの文の目的語のときの関係代名詞を〈目的格〉といい、ここでのように省略されることが多い。

*4: lead O to do 「O を～するように導く」。前置詞 to のあとには名詞が続くこともあるが、この表現では to 不定詞がきている。**暗例** This street leads to the city office. 「この通りを行くと市役所に着く（直訳：この通りは市役所へと導く）。」なお、to 不定詞 to start の目的語 writing は動名詞「～すること」。動名詞には動詞の

機能が残っているので、目的語 her music をとっている。

語句 recent [ri:snt | リースント] **形**「最近の」、Rolling Stone [róuliŋ stóun | ロウリングストーン] **名**「『ローリング・ストーン』誌 (※アメリカの大衆文化を扱う、世界的に有名な雑誌。1967年創刊)」、feature [fi:tʃə | フィーチャ] **名**「特集記事、特徴 (※カタカナ語で*フューチャーと言う人がいるが、フィーチャーの誤り)」、reflect [riflékt | リフレクト] **動** on ~ 「~を反射する、よく考える」、career [kəriə | カリア] **名**「職歴、キャリア」⇒ carrier [kəriə | ケリア]「運ぶ人、荷車」、musician [mju:ziʃən | ミュゼシャン] **名**「音楽家」、actress [æktɹəs | アクトウレス] **名**「女優 (※ actor「俳優」と対比して使われるが、男女関係なく actor「俳優」とするのが一般的)」⇒ act **動**「活動する、演じる」、Kate Nash [kɛit næʃ | ケイトナッシュ]「ケイト・ナッシュ (※1987—。イングランド出身のシンガーソングライター)」、explain [iksplɛin | イクスプレイン] **動**「説明する」、boredom [bórdəm | ボーダム] **名**「退屈」⇒ boring [bóriŋ | ボーリング] **形**「(主にものが) 退屈な」bored [bórd | ボード] **形**「(人が) 退屈して」、experience [iksperiəns | イクスピアリエンス] **動**「経験する」**名**「経験」

2 “I wrote a lot because there wasn’t much else going on in my life.”

構造 “**主** I **動** wrote **目** a lot [私はたくさん (の曲を) 書いた] **副** because [なぜなら] **副** there **動** wasn’t **主** {much else **現分** going on **副** in my life}.” [私の人生で起こっている他のことはあまり多くなかった]

*1: 動詞が直後に目的語をとるとき、その動詞を他動詞というが、動詞が目的語をとるかどうかはある程度日本語の感覚と一致すると考えてよい。ただ、その感覚がずれるものがあるので、例外として意識することになる。例えば、**暗例** We discussed the matter. 「私たちはそのことについて議論した。」は、動詞 discuss「議論する」が他動詞なので、aboutなどの前置詞を必要としない。なお、ここでは write に a lotが続いているが、a lot of songs「たくさん曲」という目的語 (必ず名詞) を省略して表したものと解釈するのが自然。

*2: 文が複数の節 (SV 構造を持つ意味のまとまり) を持ち、文の中心となる節である (主節) と、その主節に従う (従属節) に分かれることがある。この文を (複文) という。本文では、接続詞 because で導かれる節が理由を表す副詞節で従属節、それ以外 (because より前) の部分が主節である。主節を1つの品詞として考えることはなく、節が1つしかない文においては「主節 = 文」となる。

*3: <there is/are 構文> は、be 動詞のあとに主語がくる倒置構文で、主語の存在情報を初めて述べるときに使われる。「~が存在する」の意味でとらえるとき。ここでは主語の中心となる名詞は much「(数えられない) たくさんもの、こと」で、この名詞を形容詞 else「ほかの」と現在分詞の形容詞用法 going on 以降が後置修飾していると考えられる。なお、else は some や any などと始まる語を後ろから修飾する形容詞。**暗例** (Is there) Anyone else who can solve this math problem? 「この数学の問題を解ける人はほかにはいますか。」

語句 else [éls | エウス] **形**「ほかの」、go on「続く、起こる」**暗例** What’s going on? 「何が起きているのか。/ 元気がいい (あいつ)。」

3 Later, when her friends were off at university and she was stuck at home and working in a clothes shop, a lack of things to do spurred her on again.

構造 **副** Later, 「のちに」 **副** when **主** her friends **動** were **副** off **副** at university 「彼女の友人が大学に離れ

ているとき」 **接** and **主** she **動** was **補** stuck **副** at home **接** and **補** working **副** in a clothes shop, 「そして彼女が家に張り付いて衣料品店で働いている (とき)」 **主** a lack of things to do **動** spurred **目** her **副** on **副** again. 「するべきことの欠落が再び彼女を急き立てた」

*1: 本文では、a lack of things to do から始まる節が主節、接続詞 when で始まる節が従属節で、ときを表す副詞節でもある。従属節は接続詞で始まることが多く、文全体の主語や目的語 (どちらも必ず名詞) になる名詞節と、文の要素ではない副詞節を覚えておくとよい。形容詞節もあるが、形容詞は必ず名詞を修飾するから、その全体で名詞節と考えるのが実用的である。

*2: be 動詞は補語 (必ず名詞か形容詞) をとる代表的な動詞だが、be 動詞に副詞が続くこともある。そのときの be 動詞は「存在する」の意味で考えるとわかりやすいだろう。**暗例** She was (at) home. 「彼女は家にいた。」なお、ここでの off「離れて」は補語となる形容詞とも解釈できるが、このレベルで品詞を追究することにあまり意味はない。

*3: stuck は動詞 stick「接着する、刺す」の過去分詞で、be stuck は受動態 (受け身形) と判断できる。ただ、受動態での過去分詞は、主語と内容的にイコールとなる、補語となる形容詞と解釈できることも多い。ここでは stuck を形容詞と判断した。また、続く working も現在進行形の (was) working の be 動詞 was を省略 (stuck と working の並列) したかたちだが、現在分詞 working を「働いている」という進行状態を表す形容詞として解釈した。受動態における過去分詞 (-ed 形) と、進行形における現在分詞 (-ing 形) は、ともに形容詞として考えられることがあると覚えておくとよい。

*4: 英単語の訳語は、あくまでその訳が日本語として当てはまるという例であって、その英単語が持つイメージを正しく表現しているとは限らない。訳しても文意がうまく通らないときには、語が持つイメージを膨らませることを心がける。単語帳の lack にはふつう「欠落、不足」などの訳語が掲載されているが、ここでは「(するべきことが) ないこと」のイメージが思い浮かべば意味が通る。イメージで意味が正しく通れば、それで英文は正しく読めている。わざわざ時間をかけて、頭の中できれいな日本語に訳す必要はない。

5: spur は動詞で「急き立てる、拍車をかける」、名詞で「拍車」の意味。on は「(電気などが) ついて」の意味。spur (on) a horse で「馬に拍車を当てて急がせる」となるが、副詞の on はあってもなくてもよい。本文では spur on の2語で1つの動詞の意味のまとまり (<句動詞> という) だが、このときの副詞 on の位置には注意が必要。<動詞 + 副詞> の句動詞の目的語に代名詞がくるときには、必ず句動詞の間にその代名詞を挟まなくてはならない。つまり、spur a horse on でも spur on a horse でも spur her on でもよいのだが、 spur on her とすることはできない。her が代名詞だからである。**暗例** Turn on the power. 「電源を入れて。」⇒ Turn the power / it on. ⇒ * turn on it.

語句 off [ɔf | オフ] **副**「離れて」、stuck [sták | スタク] **形**「身動きがとれなくて、行き詰まって」、clothes [klóuz | クロウズ] **名**「衣類」、lack [læk | ラク] **名**「欠如」、spur [spó:r | スプー] **動**「急き立てる」

4 “There was a lot of sighing and staring out of the windows.

構造 “**副** There **動** was **主** a lot of sighing and staring out of the windows. 「たくさんのため息をつくことと窓の外を見つめるこ